15

# 俳諧文庫 十六

小紫堂

へ 5
1139
15

門 へ5
號 1139
卷 15

各国史
五畿の部
摂津の部
摂津国の部

八尾郡
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]し今新乃の祭
詞あり[illegible]侍き記す
[illegible]
明治八年三月　[illegible]

祝　新年

新しき家門の栄や梅柳　是三

[illegible]の新　晩香
[illegible]の住る結ぶ束て　[illegible]
[illegible]の引の箕　[illegible]
[illegible]の角[illegible]の芹　[illegible]
[illegible]　三

[illegible]せね烟[illegible]烟
[illegible]ちかしと少[illegible]
加[illegible]時針の[illegible]紐
[illegible]の[illegible]業[illegible]
陽[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]



[illegible]
表[illegible]の男[illegible]
[illegible]業[illegible]
[illegible]降[illegible]
[illegible]の巣[illegible]
[illegible]
水[illegible]降
[illegible]
[illegible]

まさ子さま京さまの濃くなるまで

遠寺の夕鐘乃引はじまるまで

ふ洞工夫新もされぬ山て

初門さ庵るの樵純ふ

樵るよ遊て赤乃葉り色き

伊賀の上野ていこい陸取

初秋ふ寺ハ風の和歌ある

七日八日のまるく神ふ月



樵歌せる子ふの特産とふかり

活て帰るハ子供ら二翁

抱え四も伊勢さの事乾ふ

花ハくく宮の時も茶ふ

あ門さりふ浜五箱の子ふ一重

ふるる樵さ まるる崖の多箱

うけ侍りて初秋五

稀なるまゝにおもひよるの風　晩夏

生駒の岳うを市の業にて　俳

原吹きのうつり青の寺林　夏

月を見る人をとはるゝ夕ぐれ　俳

井の堺ちのゆ君の号跡　夏

新藁を佛の餅よつやくや　俳

長月をしら野の月ゝ空のたゝらあ　夏

出雲あり会して菊の寺ゝ芭蕉　俳

七夕祭うまの業なつかき笹　夏

吟しかとくに泊やとゆ物ゝ新　俳

名のゝく吟ゝ明石ゝす船　夏

子盆よゝく鉢て月の河加減　俳

風ふゝゆ大和ゝ月ゝ　夏

行くり書き蕎麦よ行むら家の種　洒

雑煮のときうを供ふ家まわる　去

今ハ此年新ひ年入く　洒

永の年日御ミを供む春雲　去

喰ふ物やのらの旅至人　〃

末やうとて酒さへすれ　洒

世ふ向ふ春也ふりの年ま男　去

名古屋ハ京清須特産　洒

新風ふ喰蕎ら蕎の白ふり　去

日照ふ味ふ月ある六月　洒

ふ新ふゆふみの春ふ　去

ふ新ふゆふみの春ふ　洒

ふ新ふゆふみの春ふ　去

笑ふ書ふふふ神の蝋　洒

鶏蕎流のか蕎ふ話ふ　洒

清ふふの新ふ喰はら　去

物ふのさふれさふふ秋　洒

[illegible]　　玉

[illegible]　　洸

[illegible]　　玉

[illegible]　　洸

[illegible]　　玉

[illegible]　　洸

百韻

山乃為待中秋月のたなかる　　黙玉

草の叩きの[illegible]夕月　　晩香

[illegible]　　玉

叩[illegible]　　玉

陰揚の[illegible]　　玉

ふと[illegible]　　玉

[illegible]の[illegible]　　玉

小野　一二羽[illegible]　　洸池

出羽の国なる姫ヶ崎

玉

嘆き問ふた稲荷の社

玉

供まうる人の須利の宮

玉

ねのもとに立る車引出む

玉

家もなくして明くれば家のうち

玉

宮あらひて寒る雀鮭

玉

やう去てゝ雀ひ姫と云へぬる

玉

揚弓 弾者うたのそらうて

玉



ゆうとうと遠寒きる芝の陰

玉

海のうへうらやうて日の出る

玉

蓑ゆうまきの一のくき拾所末

玉

あんぢ若紫なるまゝ新の新

玉

牛の子ひとうとうあいし月と花

玉

ちゝむ やうみとやるむか伝蛙

玉

天道まはゆのうの星も寒むしん

丶

伊文の方ゆけを思ふ打中

玉

かしたるてとうはく皇儲　よ

子牧く大黒の像　ま

そさくはと普請中の町はつき　よ

そちらちきはいたゐ師走かり　ま

尓りてまむとよさろよ雪の峯　よ

粟の粉餅の名物そ家　ま

清水への道小猿の辞義のかなしくて　よ

智の利と出来ぬ才　ま

文緒をしてもちさかりきりくし　よ

松坂綿まとのきるふ新居　ま

后の月さ河けあきと渡るくり　よ

呼て家はくし菊葉秋花　ま

隣の戸妻秋の恋わりいかのつのり　、

東向むろまひとくへみく書　よ

空ちろく船頭衆のかしこまり　ま

忠義おさくく口ハきくの重ね　よ

拭ふて又書きくる百年紙　玉
かるいう味の心太　玉
四方梅の付木きて有徳　玉
笛の音を聞て風流　玉
作く稲に雲山雲なる景色　玉
やうを姿の結句やさし　玉
みるかゝ来君乃おもの加ゝし　玉
さゝはさらも百を　玉

けしの実のみとうき世もさうし　玉
うひくしけよ情の言葉　玉
物乎の付舞して紙を使ひ　〃
言ちらし乱ちく舞て乗　玉
立ぶる芦の湯書法い一まのハり　玉
下ま本墓ちけて独る知己　玉
雑舞又関名仲宮のうち我ら　玉
吋斗金せて　ちとの利限　玉

時て又 ちこ〻 窓の日のうつり

ちか 家くちの外 山茶花

ちまきよりいとひ 鶯きて 夏の院

岩屋のうつり 鬼貴 信さ

星雪も 侍 ちまきし ちまき 二合

京よ 清くもの 粟 鶯 馬き

古間よ 金 時間 炉 さ 月

時〻の 外 時 出 ち

雪雪の 知 人 小 和 川 鳴

鉢 菓子 実て 居 一 生

仲 よて 栄 時代 の 物

変ら 行 ち 山 野 生

日 生 の 思 清 生 生 長

高て 居 生 長 の 風

引 げて 如 屋 の 柳 緑 と

あ 小 ち 生 き 生 の ち

作阿弥に拵えて布袋を後生
お宮参りの爺婆新してたつ
お爺人出るまでこの所出たより
清くく雪の中に蕎麦刈り出
お山やうに思ひ出の紅葉
汝年寄はいと暇なり澤抗
餅を求むる婆の出り雪
仕事やすみて寒さうな人

能者つけて高うもあり出
うそくく時の庭の新まり
何の又形なる来て下男
ものかなのうつて出流抱
今しかるあるまて裏をまつて
能ふせうまくうつくまる鶏
閑別に耳かきまて柴を拾瓶
古人船の形を出る

夫婦より外まで推し及ぼし

まことに扇風の恵深き世

和国の家々こぞりて八重咲

こそ豊作のぬ祈の霊のこと

やう〳〵梦大の絵をかきちし

我法華にて皆拝まる

海まで不思議集め浅

草の如くおろがまれて弥









年寄の言葉を聞きちがへて

国々の神のかりうつさ

張幕にたゝみ四つる虫の

言かけて祈りゆうまとこ

神奈川や　鬼怒川
一つ家に　寒さ忘れ
一種も　なしこの夜
清月や　牡丹
真昼　月　寒の
強一の　り　紙　男
兄　猫　寒　一　寒　ば
鶏　鶏　や　ほ　の　く
ち　ば　む　高　猫　紙